

ルシオ・コスタとブラジルの文化財保護思想

荒井 芳廣

一般科

Lucio Costa and the patrimonial thought in Brazil

Yoshihiro ARAI

Abstract

Lucio Costa was the Brazilian architect and city planner who was born in 1902 and died in 1998 and known for designing the pilot plan of the Brazilian capital (Brasilia). He also played an important role in the development of the patrimonial thought in Brazil. This paper surveys his life history and shows that he was one of the typical Brazilians in the twentieth century who sought for a national identity all his life and so he became one of the most influential person in the formation of Brazilian national culture.

Key Words: Brazil, Architecture, Patrimonial thought

1. はじめに

ブラジルの都市風景を代表する場所がどこかという設問に対し、即座に答えることは難しい。一瞬ためらってとりあえず「ブラジリア」と答えるのが順当なところであろう。ユネスコの世界遺産として認定されたこの都市は、好悪の価値判断は別として世界の他の地域には見つかからない独創的な都市計画と建築デザインを有した都市だからである。しかしそう答えてしまった後に頭に浮かんでくるのは、オーロ・プレット、サルバドール、リオ・デ・ジャネイロなど植民地時代から短い帝国時代を経て共和国初期に至る時代の歴史的都市である。実際に外国人がいちばん多く目にするブラジルの都市風景はサンパウロのパウリスタ大通りかリオ・デ・ジャネイロのコパカバーナに海岸通りかも知れない。個人的には、もっとも愛着があるのは近年保存修復が完成しつつあるレシーフェ市の港湾地区「レシーフェ」あるいはカピバリビ川沿いのオランダ風町並みである。ヨーロッパ人による植民が始まって 500 年になろうとしているブラジルは、その地理的広大さによって倍加された形で、異なった時代に属する様々な都市遺産が散在している。その 1

つ 1 つは、イエズス会士を始めとする修道会の建造物のような宗教的布教努力の成果であったり、17 世紀のオランダ人によるレシーフェの占領のような偶然的な征服・侵略の結果である。またバル・エポック時代のリオ・デ・ジャネイロのようなヨーロッパ文化に対する憧憬と模倣の産物であったり、それに続くモダニズムの建築および都市計画のように前時代の様式に対する反発の産物であったりと、各時代各個人の主体的意図の多様性を反映している。

従ってそれらを記録し、保存し、さらには評価しようという営みを組織的かつ客観的に行うことは決して易しい課題ではない。「文化財保護」という仕事は表面的には、記録・修復・保存などのテクニカルな作業の連続に見えるが、その背後にはこうしたきわめて人間的な思考や感情に対する判断を含んでいる。しかもこうした作業を行う者自身、超越的な視点をもつ存在ではなく、特定の時代・特定の社会に生きる具体的人間である。ましてや実作者として数多くの建築デザインを生み出したばかりでなく、教育にもたずさわり、首都ブラジリア建設という国家的事業の推進者の一人であった人物が、文化財保護政策実行組織の確立期において重要なポストにあつ

たという事実はその国の文化財保護政策に影響を及ぼさずにはいかなかった。本稿はルシオ・コスタ (1902-1998) とブラジルの文化財保護政策の関係をたどることによって、すなわちルシオ・コスタという具体的な人物の価値体系をグリッドにして、現在ブラジルにある建築群が構成する布置を明らかにしようという意図をもって

いる。

ルシオ・コスタは、1998 年の 6 月 13 日に亡くなった。世界遺産の指定を受けた現代都市ブラジリアのパイロット・プランを設計した業績によって国際的に知られる一人の建築家の死であった。筆者はブラジリアの建設にもランドスケープ設計者として携わったホベルト・ブルーレ・マルクスの業績を追跡する過程 (荒井: 1997) で、1920 年代のリオ・デ・ジャネイロの国立美術学校での交友関係および師弟関係、1940 年代に行われたミナス・ジェライス州の州都ベロリゾンテ郊外のリゾート都市パンブーリャのプロジェクト、同じミナスジェライス州にある歴史都市オーロ・プレットの保存修復などの一連の事業とそれらを通じて形成された人的ネットワークが、ブラジリアという国家的事業を短期間のうちに実現させた原動力であり、したがってその非人間性をしばしば批判されるブラジリアという都市のモダンな形象は一見したときの平板な印象とは異なる歴史的意味の深さを付与された形態であることを理解できる。

1902 年生まれで、ほぼ 20 世紀を初めから終わりまで生き抜いたこの建築家は、上記の一連のプロセスのなかで常に中心的役割を演じていたわけではなかった。20 世紀ブラジルを代表する建築家といえば、後輩のオスカー・ニーマイヤーに一步譲るであろうし、文化財保護行政における功績に関しても、機関の創設者で行政をリードしてきたロドリゴ・メロ・フランコ・デ・アンドラーデの相談役にすぎなかった。しかし副次的役割を演じながらも、そうしたプロセスの中に彼は常時いた。常時そこにいることにより、そうしたプロセス、ブラジルの建築史、ブラジルにおける空間創造の歴史が、ある一定の方向に収斂していった。すなわち歴史の流れに大きな影響力をもった、と言える。いわば教育者的な役割であるが、それはモダニストの建築家としての実作によって以上に、彼の建築史的研究とその結果としての建築史的認識に由来していたと思われる。モダニストの建

築家としての実作も、彼の建築史的研究とその結果としての建築史的認識も、いずれもルシオ・コスタ個人の足跡であるが、同時に 20 世紀のブラジルが追い求めてきた国家的同一性探求の道もあった。そしてルシオ・コスタの場合、それは、以下で繰り返し述べるように、個人の足跡が国家的同一性探求の象徴となっているという意味合いからではなく、彼の行動が、諸制度や人的ネットワークを通じて実際に影響力をもったという意味で、建築という表現を通じて語った 20 世紀のブラジルを代表する思想家であった。

2. 1920 年代のリオ・デ・ジャネイロの国立美術学校での交友関係および師弟関係

ルシオ・コスタは、1902 年、フランスのツーロンでジョアキン・ヒペイロ・ダ・コスタ (Joaquim Ribeiro da Costa) とアリーナ・フェレイラ・ダ・コスタ (Alina Ferreira da Costa) の男児として誕生する。父親は海洋技師で、ブラジルに数ヶ月戻った後、1910 年再びヨーロッパ、今度は英国に戻る。ルシオ・コスタ自身は 1917 年、ENBA (Escola Nacional das Bellas Artes, 国立美術学校) に入学し、1922 年修了組となる。同じ時期、ENBA で絵画を学んでいたのが「エスタード・ノーボ」時代のブラジルを代表する画家となる C・ボルチナリである。

ENBA を卒業後、ルシオ・コスタは、レベッチ (Rebecchi) 商会に初就職、次いでエイトール・デ・メロ (Heitor de Mello) 技術事務所で働き、22 年から 26 年まで、フェルナンド・ヴァレンチン (Fernando Valentim) と共同で設計事務所をもつ——この時期を彼自身は「折衷=アカデミー様式」時代と呼んでいる。26 年、ヨーロッパに戻り、27 年中葉まで滞在する。28 年、ジュリエッタ・モデスト・ギマラインス (Julieta Modesto Guimarães) と結婚、とマリーア (Maria) とエレナ (Helena) の二人の娘をもうける。1930 年から 31 年まで、後述する後の SPHAN の会長ロドリゴ・メロ・フランコ・デ・アンドラーデの要請で、ENBA の校長を務める。さらに 31 年から 33 年まで、グレゴリ・ヴァルシャフスキー (Gregori Warchavchik) と共同の設計事務所をもつ。この時期にガンボア (Gambôa)

のプロレタリアート住宅群とシュワルツ（Schwartz）邸の設計をする。シュワルツ邸の庭園は、ブーレ・マルクスの庭園作家としての最初の仕事で、ブラジリアの主要な建物になされた外部空間のデザインを頂点とするオスカー・ニーマイヤー、ブーレ・マルクスとの協働関係の始まりである。ブーレ・マルクスは1909年のリオ・デ・ジャネイロに生まれ、ベルリンに美術の勉強のために留学するがリオ・デ・ジャネイロに戻ってENBAに入学してポルチナリらのもとで絵画の勉強を続けるのが1930年のことである。従ってこの時期、ルシオ・コスタとポルチナリは教師として、ブーレ・マルクスとオスカー・ニーマイヤーは学生としENBAにおいて出会うことになるのである。そのオスカー・ニーマイヤーは、1906年の生まれで、ルシオ・コスタより4歳年下であるが、ENBAの卒業は10年以上も遅い。しかし1936年のギュスターヴォ・カパネマ（Gustavo Capanema）大臣によって依頼された現在もリオ・デ・ジャネイロにある「教育健康省」本庁舎プロジェクトでは、ルシオ・コスタの設計事務所まで図面引きを行っていたが、設計上のリーダーシップはすでにルシオ・コスタに代わってオスカー・ニーマイヤーがリーダーシップを取るようになっていた。1939年のニューヨーク万国博のブラジル館プロジェクトでは建築家としてのオスカー・ニーマイヤーの優位性が再確認される。それでもこの協働関係＝友情関係は持続してその後も様々な作品を創造し続け、また理論家として教育者としてのルシオ・コスタの役割もまた維持されてゆく。というのも彼には、建築家として、「実作者」、あるいは「教師」としてばかりでなく、「建築理論家」、「建築史家」そして「文化財保護行政官」としてなど同一の建築の分野を構成する様々な異なる領域で活動を行っていたからである。

3. ロドリゴ・メロ・フランコ・デ・アンドラーデとの出会い

ルシオ・コスタの足跡を考える上で、オスカー・ニーマイヤーに劣らず重要な存在はロドリゴ・メロ・フランコ・デ・アンドラーデ（Rodrigo Melo Franco de Andrade, 1898-1968）である。コルビジエの影響とオスカー・ニーマイヤーとの協働が、彼の「建築スタ

イル」すなわちモダニズムと関わるネットワーク形成するとしたら、彼の建築史研究とその結果得られた「建築史的認識」あるいは「価値判断」——コロニアルあるいはバロック建築に対する評価——に関わるネットワークを形成する。しかもオスカー・ニーマイヤーが実作の上でそうであったように、建築史的認識の領域での制度上の影響力という点では、ブラジルの文化遺産に対する国家行政の長であったロドリゴ・メロ・フランコ・デ・アンドラーデはルシオ・コスタより優位の位置を占める人物である。つまりこの領域でもルシオ・コスタは副次的な役割を演ずることになる。

ロドリゴ・メロ・フランコ・デ・アンドラーデは、1898年、ミナス・ジェライス州のペロリゾンテに犯罪法の教授の子として生まれ、12歳の時、中等教育を受けるためにパリに留学する。この時期に住まいとしていた叔父の家で、後に彼を取り巻く人脈の基礎となる人物たちと出会う。ブラジルに戻った後、最初はリオ・デ・ジャネイロで法律を一年間学ぶのを皮切りに、ペロリゾンテ、サンパウロ、再びペロリゾンテを経てリオ・デ・ジャネイロに戻った。この移動の日々は、多くの人との出会いの時期であり、ジャーナリストとして行政家としての後年の活動に多いに有益な人脈をつくりあげた。1921年、ジャーナリストとしての経歴を開始、その後様々な新聞、雑誌の編集に携わり、戦闘的なジャーナリストとして名を馳せることになる。1930年、教育健康相のフランシスコ・カンボス（Francisco Campos）の秘書官となり、5年間にわたりこの任を務めた。ルシオ・コスタをENBAの校長に推薦したのはこの時期である。1936年、マリオ・アンドラーデおよびマヌエラ・バンデイルの推薦により後継のギュスターヴォ・カパネマ教育健康相から、文化財保護のための行政機関である「国立歴史芸術遺産サービス」（SPHAN, Serviço do Patrimônio Histórico e Artístico Nacional）を組織することを要請される。その後、1968年隠退するまで30年にわたり、この機関の長を務める。この新設された官庁には、推薦者であったマリオ・アンドラーデおよびマヌエラ・バンデイルを始めとして、当時のブラジル文化界の主流人物たちが相談役として名を連ね、ロドリゴ・メロ・フランコ・デ・アンドラーデの豊富な人脈を物語っている。ルシオ・コスタもその一人であった。

SPHAN による文化財への登録を年代順に見ていくとある種の偏りがあると指摘されることがあるが、それにはいくつかの理由が考えられる。まず最初に考えられる理由は、初代の SPHAN の会長であるロドリゴ・メロ・フランコ・デ・アンドラーデがミナス・ジェライス州の出身であるため、SPHAN の初期は同州のバロック宗教建築の文化財への指定が多いのではないかと考えられる。次にルシオ・コスタが相談役になっていることに由来する偏りである。彼は帝制時代の建築遺産よりも植民地時代のそれを高く評価する傾向をもっていた。これは ENBA 時代以来の反アカデミズムの建築スタイルにも深く関わる事実である。ルシオ・コスタはモダニズムの建築家とみなされているが、後述のように彼が、モダニズムへと作品のスタイルを変え、ブラジルの建築界におけるモダニズム運動の指導者とみなされるのは 1931 年以降のことであり、それ以前はネオ・コロニアルのスタイルであった。

4. リカルド・セヴェロと「ネオ・コロニアル様式」 およびルシオ・コスタによる「バロック」の発見

リカルド・セヴェロ (Ricardo Severo da Fonseca Costa, 1869-1928) は、最初にブラジルに來たのは 1902 年であったが 1908 年最終的にブラジルに永住したポルトガル人で、彼が来伯した当時すでにサンパウロにおいて高名な建築家であったハーモス・ヂ・アゼヴェード (Ramos de Azevedo) とともにサンパウロのブルジョワ階級の住宅を数多く残している建築家である。彼は住宅の設計と同時に講演や執筆活動にも重きを置いており、「建築学的ナショナリズム」とも言うべき立場から、当時のブラジルで支配的であったイタリア系あるいはドイツ系建築家による折衷様式 (ecletismo) に反対して、ブラジル固有の様式の重要性を主張した。具体的には、建築史的認識としてはコロニアル建築の評価であり、設計デザインの実践のうえではネオ・コロニアル様式であった。ブラジルのネオ・コロニアル様式は、リカルド・セヴェロによって理論づけられ、ヴィクトール・ドゥブグラス (Victor Dubugras, 彼は 1868 年にフランス生まれ、1891 年からブラジルで活動を行ったフ

ランス人建築家でアール・ヌーボー様式の建築家でもあった) によって具現したといわれるが、学生としてまた教員として、アカデミズムの牙城である ENBA にあって、アカデミズムと鋭く対立していたモダニズム以前のリオ・デ・ジャネイロのルシオ・コスタも、反アカデミズムの立場を表明するための「建築史的認識」としてまた「建築設計のスタイル」としても、ネオ・コロニアル様式を自分のものとしたが、リカルド・セヴェロの影響を指摘されている。「建築設計のスタイル」がモダニズムに転換してのちも、遅れて発見することになるブラジル・バロック建築の評価とともに、彼の「建築史的認識」として一生維持されることになる。1972 年まで続ける SPHAN の相談役としての仕事に生かされる、あるいは具体的な形となって現れてくることになる。

ブラジルのバロック建築は、ポルトガルのバロックの影響の下に、サルバドールとカリオ・デ・ジャネイロといった海岸部の諸都市では展開したが、ブラジル独自の様式が十全なかたちで展開するのは、金とダイヤモンドの開発とともに発展した内陸部の (ヴィラ・リカ・ヂ・) オーロ・プレットを中心とする諸都市 (デアマンティーニャ、マリアーナ、コンゴニャス・ド・カンポ、サバラー、サン・ジョアン・デル・レイ、チラデントスなど) においてである。ルシオ・コスタがこれらの都市のバロック建築に最初に接触したのは、1922 年、ENBA の委託によりデアマンティーニャを訪ねたときである。すでにリカルド・セヴェロによってネオ・コロニアル様式に対して眼を開かれていたルシオ・コスタも、バロック建築は「発見」していなかった。彼がブラジルのバロック建築を本格的に研究し、自分の「建築」概念のなかに積極的に組み入れていくのは、彼が SPHAN の相談役として研究・登録の仕事を開始して後のことであろう。

(Lúcio Costa, 1995 所収の「不可欠なドキュメンテーション」(1938)、「ルーソ=ブラジレイロの家具」(1936)、「ブラジルにおけるイエズス会の建築」(1941)、「アントーニオ・フランシスコ・リズボーア、ことアレイジャディーニョ」などの一連の論考を参照)。亡くなる直前に出版された論文集、Lúcio Costa, *Registro de uma vivência* の末尾にあるインタビューで「現代建築と歴史保存はいかにして結合可能か?」という単刀直入な質問に対し、「外国では、現代

建築を好むものは伝統的なものは嫌いか、またその逆かもしれない。ここ（ブラジル）では違う。現代的なものの伝統的なものが手を携えて進む。SPHAN の研究／登録部門の長であったが、現代建築は我々の伝統と矛盾しない」とこれもまた明快な答えをしている（Lúcio Costa, 1995）。しかし 1922 年のデアマンティーニャ体験の意義は決して見逃すことはできないはずである。その理由の一つはこの街が後にブラジリアの建設を実行することになるブラジル大統領 J・クビチェックの出身地である、という事実にあるが、何よりも重要であると思われるのは、この年、サンパウロでは「近代芸術週間」をきっかけにモデルニスモの運動が始まったというという年代的な事実にある。というのはルシオ・コスタ自身、現代ブラジルの芸術家として、リオ・デ・ジャネイロの ENBA の出身者として、ブラジル・モダニズム建築における「ブラジル性」とは何かという探求を始めていたに違いないからである。

5. サン・ミゲル・ダス・ミッソインス（São Miguel das Missões）のイエズス会伝道村の遺跡調査と付属博物館の設計

サン・ミゲル・ダス・ミッソインス（São Miguel das Missões）のイエズス会伝道村の遺跡調査と付属博物館の設計は、彼がその当時もっていた建築史的認識に対応する実践活動の二つの形態である。すなわち(1)コロニアル様式の評価、即コロニアル建築の保存修復、(2)コロニアル様式の評価、即ネオ・コロニアル様式建築の設計・建造。遺跡の調査の方は、ルシオ・コスタは監督責任の役にあっただけで、実際に行き報告を作成したのはマイヤー・ホフファーという建築家であった（Mayerhoffer, 1947）。博物館はルシオ・コスタ自信が提唱して建造されたものできわめて小さな建物である。現在は入り口でない側がガラス張りになっているが、最初は壁のない非常にシンプルな建物であった。しかし(1)ルシオ・コスタの建築家としてのキャリアにおいてモダニズム以降に設計されたという事実、すなわちネオ・コロニアル様式とモダニズム様式とが両立するあるいは両立しなければならないと考えていた事実、(2)前記の(1)と(2)が緊密に結びついた状況で設計されたとい

う事実において、ルシオ・コスタの足跡のもつ意味を考える上で、小規模ではあるが重要な建造物である。

6. ル・コルビュジェとの出会いとモダニズムへの展開

ル・コルビュジェが最初にブラジルを訪れたのは 1929 年のことであった。ブエノスアイレス訪問のついでにサンパウロトリオ・デ・ジャネイロに立ち寄ったもので、ENBA でも講演を行った。この時の思い出を「ル・コルビュジェの現存」（Presença de Le Corbusier）という 1987 年に行われたインタビューで「当時、完全に疎外されていた私は、そこに出掛けていくことを躊躇っていた。そのため少々遅れていったので部屋はもう人でいっぱいだった。ENBA の部屋の扉という扉は人であふれていた。私を彼が話す姿を見た。終わる少し前までそこにいて、切迫した現実とは無関係な、完全にリラックスした気分を外へ出た」と述べている。サンパウロのモダニズムの運動は既に 1922 年に始まっていたし、ヨーロッパでのル・コルビュジェの活動についても知っており、自分自身でも建築学上のモダニズムについて模索していたはずである。このインタビューで述べているように少なくとも 1929 年の時点では、モダニズムについて距離を感じていたようである。

ブラジルの最初のモダニズム建築は、1920 年代のブラジルで建築の分野でのモダニズム運動の中心的人物であったロシア系ブラジル人のグレゴリ・ヴァルシャフスキーによって設計された「カーサ・モデルナ」（Casa Moderna, São Paulo, 1928、現在はモデルニスモを代表する画家であるラゼール・シガールの美術館として IPHAN の管理下にある）であるが、ル・コルビュジェは 1929 年の来伯のさいこの家を訪ね、ヨーロッパに戻ると前年に設立した CIAM（Congrès internationaux d'architecture moderne）の南米代表に指名している。

それからわずか 2 年後の 1931 年から 33 年まで、グレゴリ・ヴァルシャフスキーと共同の設計事務所をもって、ガンボアのプロレタリアート住宅群とシュワルツ邸という、二つのいわゆるモダニズム建築を設計してモダニズムへの転換を果たしたルシオ・コスタは、1931 年に ENBA で「革命的サロン」展を主宰し、1936 年にはル・

コルビュジェをブラジルに招くなど、1930年代におけるモダニズム建築運動のリーダーになっていく。

7. パンプーリャからブラジリアへ——1940年代前半のパンプーリャのプロジェクトと1950年代後半のブラジリアの建設

ミナス・ジェライス州の州都ペロリゾンテの郊外に位置する人口湖をとりまくリゾートタウン、パンプーリャの「カジノ」（現、近代美術館）、「ダンス・ホール」、「ヨット・クラブ」、「聖フランシスコ教会」などからなる建築群のプロジェクト（1941-43）には、ルシオ・コスタは参加していない。この建築群のプロジェクトにはルシオ・コスタを除けば、これらの建築物を設計したオスカー・ニーマイヤーを始めとして、10数年後に行われるブラジリア建設のスタッフのほとんどが参加している。プロジェクトを要請したのは、後に共和国大統領としてブラジリア建設という国家的大事業を遂行した当時はペロリゾンテ市長であった J・クビチェックである。これにランドスケープ作家のブーレ・マルクス、画家のポルチナリなどブラジリアの建設でも重要な役割を演ずる作家たちが参加している。だがここにもルシオ・コスタと SPHAN の会長であるロドリゴ・メロ・フランコ・デ・アンドラーデの影は現存していた。パンプーリャこの建築群のなかでも最も有名な、ポルチナリ作のポルトガル青タイル (azulejo) の壁画のある「聖フランシスコ教会」は、SPHAN によっていち早くブラジルを代表する文化遺産として保存が決定されたオーロ・プレットにある 16 世紀のアレイジャディーニョ (Aleijadinho) の手になる同名の教会を意識して作られたものである。そして同時期にロドリゴ・メロ・フランコ・デ・アンドラーデのもとでオーロ・プレットの保存修復とそのための調査研究を指揮し、自らもアレイジャディーニョについての研究を発表していたのがルシオ・コスタであった。ギマラエンス (Gimaraens, 1996: 32) は、オーロ・プレットの 18 世紀のバロック建築と 20 世紀のモダニズムの建築群パンプーリャのあいだの関連については語るパウロ・サントス (Paulo Santos) の次のような言葉を紹介している：「パンプーリャの聖フランシスコ教会は真の傑作であり、20 世紀の

建築に対する重要性は、18 世紀の建築に対するアントーニオ・フランシスコ・リズボア、ことアレイジャディーニョに比することができる。」同じくこの教会のデザインについてもギマラエンス (Gimaraens, 1996: 31) はオスカー・ニーマイヤーに対するルシオ・コスタの影響力を物語るフーベン・ブラーガ (Rubem Braga) の次のような言葉を引用している：「オスカーはパンプーリャの聖堂の図面を見せたけれど、それは実現しなかったと、ある時、ルシオは言った。オスカーは別の設計図をつくった。それが実際に建てられた聖堂である。」

1956 年、パンプーリャ・プロジェクトを決定したペロリゾンテ市長の J・クビチェックはミナス・ジェライス州知事を経て、共和国大統領となる。彼は大統領当選と同時に首都の移転とブラジリア建設を宣言し、4 年後の 1960 年には、それを実現させてしまう。計画の発表自体も世論を騒がせたであろうが、何よりも人々を驚かせたのは計画の迅速な実現であったろう。その第一の原動力がこの時期におけるブラジル経済の飛躍的發展であることは言うまでもないことである。計画の実現を可能にしたこれに劣らず重要な要因は、プランを決定するスタッフとスタッフのあいだの緊密なチームワークであったと思われる。ブラジリアの建設の歴史とこの都市をめぐる様々な議論についての詳細な考察は本稿の目的ではないので別稿に譲りたいが、この都市が ENBA 以来、ルシオ・コスタが築き上げてきた人的ネットワークとこの人的ネットワークが有している可能性の集大成であることは間違いない。彼がこの都市の全体プラン (Pilono Pilot) の設計者であったということの意味は、これまで述べてきたように、モダニズムの都市であるということを超えて、ブラジルの自然（ブーレ・マルクスのランドスケープ・デザインを通じて）へ、ブラジルの宗教史、建築史的伝統（オーロ・プレットを始めとする歴史的遺産）へと参照されることを意図していた、という点にあるように思われる。

結語：ブラジルにおけるナショナリズムと文化政策

ブラジルにおける建築学上のモダニズムは、1922 年の「近代芸術週間」 (Semana de Arte Moderna) に始まる、文学、美術、音楽のモダニズムと不可分な関係に

ある。両者は、人的ネットワークを共有、そのなかでも特にマリオ・アンドラーデやマヌエル・バンデiraといった行政にも大きな影響力を持った芸術家／評論家の支援によって、ブラジル文化史の主要な潮流に位置することが可能になった。しかし一方では、「(1) ヨーロッパの前衛芸術の方法によって (2) ブラジル性を追求する」という定式は共有するが、前段の (1) 「ヨーロッパの前衛芸術の方法によって」に関しても、後段の (2) 「ブラジル性を追求する」に関してもそれぞれのジャンル、個々人によって異なってくる。創造の世界で個性は当然のことであるが、結果として、建築上のモダニズムは、他の分野のモダニズムよりもブラジルの現実（自然や伝統）に深く関わり、浸透していったのではないと思われる。このプロセスにルシオ・コスタの足跡、彼の選択・判断が大きな影響力をもったのではないと思われる。例えば次のようなエピソードがある。なぜグロピウスではなくル・コルビュジェなのか？という問いに対し、いくつか答えを挙げているなかに、ル・コルビュジェの社会学的視点を挙げている。モダニズムの問題を、単なる建築デザインの問題ではなく、広く社会的な問題として考察し、『ウルバニスム』、『今日の装飾芸術』などのような著作や『エスプリ・ヌーボー』誌を発行していたル・コルビュジェを選択したのはルシオ・コスタの判断であった。本稿では、ルシオ・コスタ個人の建築思想と人的ネットワークを文化財保護政策と関連づけて辿ってみた。彼を中心とした小さなコンテクストを切り取った時に彼が果たした役割の性質と重要性については明らかにできたと思われる。しかしそれらの小さなコンテクストを取り巻いている大きなコンテクスト、「1930年の革命」と「エスタード・ノーボ」の文化政策、文化政策の制度的枠組みとこれを構成する文化官僚たちの社会階層とその思想的・心性的傾向（ロドリゴ・メロ・フランコ・デ・アンドラーデの役割は重要であると考えられる）、文学、絵画、音楽作品の生産の社会学的条件などについてはほとんど触れることはできなかった。しかしルシオ・コスタの足跡のもつ社会的意味をさらに深く理解するためにそれは不可欠である。それはいわば 20 世紀ブラジル文化の社会学研究という遠大な課題である。しかし逆に言えば、20 世紀ブラジル文化の社会学研究という遠大な課題にとってルシオ・コスタ

という個人の足跡を理解することがまた不可欠であることを示しているのである。

付録（１）ルシオ・コスタの履歴書 (Autobiografia, 1987)

「1902 年、フランスのトゥロンで Joaquim Ribeiro da Costa と Alina Ferreira da Costa の男児として誕生。父は海洋技師で、ブラジルに数ヶ月戻った後 1910 年再びヨーロッパ、今度は英国に戻る。1917 年、ENBA (Escola Nacional das Bellas Artes, 国立美術学校) に入学、1922 年修了組となる。

Rebecchi 商会に初就職、次いで Heitor de Mello 技術事務所で働く。

22 年から 26 年まで、Fernando Valentim と共同で設計事務所をもつ——折衷＝アカデミー様式時代。

26 年、ヨーロッパに戻り、27 年中業まで滞在。

28 年、Julieta Modesto Guimarães 結婚、と Maria と Helena の二人の娘をもうける。

ENBA の校長を務める (1930-31)。

31 年から 33 年まで、Gregori Warchavchik と共同の設計事務所をもつ。この時期に Gambôa のプロレタリアート住宅群と Schwartz 邸の設計をする。

33 年から 36 年まで、Carlos Leão と共同の設計事務所をもつ。

35 年、Anísio Teixeira 連邦自治領区立大学大学院教授を務める（論文「新建築論理」"Razões da nova arquitetura"）。

36 年、Capanema 大臣に「教育健康省」本庁舎の設計を依頼される。

1937 年、サン・ミゲルのイエズス会伝道村博物館 (Museu das Missões) の設計を行い、1972 年まで SPAHAN の相談役を務める。

38 年、オスカー・ニーマイヤーを連れてニューヨークに赴き、1939 年の万国博覧会のブラジル館の設計を行う。

40 年代、Hungaria Machado 邸、Saavedra 邸、Guinle 公園、フライブルグの Park Hotel などの設計を

行い、SPHAN の勧めでポルトガルにて研修。

50 年代には、パリのユネスコ本部の建設の補佐をし、ヴェネツィア会議に参加する（「建築家と現代社会」"O Arquiteto e a Sociedade Contemporânea"）。Parson School of Design でニューヨーク、会議でエジプト、レバノンに行く。イタマラチの要請でモスクワに行く（大使館の設置）。さらに記念碑問題で補佐するためにケネディ家の要請でボストンへ行き、またイエール大学およびコーネル大学に行く。Banco Aliança の設計やジョッキー・クラブの新しい本部の建設にも参加する。

1957 年、ブラジリアのパイロット・プランの設計。

1960 年、ハーヴァード大学より名誉博士号を授与される。

1961 年、マサチューセッツ工科大学の 100 周年記念に招待される（講演「新しい科学的技術的ヒューマニズム」"O Novo Humanismo Científico e Tecnológico"）。

60-70 年代、Barra, Sao Luis, Alagados, Casa-blanca, Nigeria のプロジェクト。フィレンツェにおいて相談役を務める。（以下略）」（Lucio Costa "Autobiografia" 1987, Alberto Xavier org. *Arquitetura moderna brasileira: depoimento de uma geração*, ABEA, 1987 という本のためにルシオ・コスタ自身が特別に書き下ろしたもの）

付録（2）ブラジルにおける文化財保護思想の足跡 (1936-1990)

1936・マリーオ・アンドラーデがギュスターボ・カパネマ大臣の要請により、文化遺産の保護に関する連邦(国家)の任務についての草案を作成する。

・ロドリゴ・メロ・フランコ・デ・アンドラーデの指揮のもとで国立歴史芸術遺産サービス (SPHAN) が暫定的な形で機能し始める。

1937・11月30日に SPHAN を設置し文化財保存研究所の規制を行う大統領令 25 号が公布。

1938・1月29日に共和国大統領による文化財保存の取り消しに関して規定する大統領令 3866 号が公布。

1946・SPHAN は DPHAN (国立歴史芸術遺産保護部) と名称を変更。

1961・9月26日、考古学および先史学的モニュメントの保存について規定する法令 3929 号が公布。

1967・ロドリゴ・メロ・フランコ・デ・アンドラーデが隠退し、SPHAN の指揮をヘナート・ソエイロに移譲。

1970・国による歴史的芸術的遺産の保護をテーマとする州知事たちの会合の実現と『ブラジリア協約』文書の作成。

・DPHAN が IPHAN (国立歴史芸術遺産保護研究所) に改組。

1971・上記と同一のテーマに関する新任の州知事たちの会合の実現と『サルバドール協約』文書の作成。

1972・SEPLAN (共和国大統領府計画事務局) に接合する形で PCH (歴史的都市再生プログラム) を設置。

1974・MEC (教育文化省) におけるニー・ブラーガ体制の始まり。

1975・MEC において『文化に関する国家政策』文書の作成。

・12月15日、IPHAN の領域内で実行される保存およびその取り消しに対し教育文化相の認可を義務とする法令 6292 号の公布。

・国立文化調査センターの創設。

1976・IPHAN の内部規定の認可。

・CNRC (国立文化情報センター) の協定の更新。

1977・PCH はミナス・ジェライス、エスピーリト・サント、リオ・デ・ジャネイロ各州で活動を展開。

1978・MEC におけるエウロ・ブランダン体制の始まり。

・CNRC の協定への追加項目に関する署名。

1979・MEC におけるエドゥアルド・ボルテラ体制の始まり。

・アロイージオ・マガリヤンスが IPHAN の指揮を引き受ける。

・PCH が IPHAN に統合される。

・「オーロ・プレット」セミナーが開催。これにより保存される歴史的都市の住民との対話の実行が始まる。

・ブラジリアの高等農政学院において IPHAN,

- PCH, CNRC の職員が会合。
- ・ MEC の枠内に、国立歴史芸術文化財保護事務局 (SPHAN) と国立記念物助成財団 (FNPM) が設置。
- 1980 ・ アロイージオ・マガリヤインスが SPHAN の事務局長と FNPM の会長に任命。
- ・ FNPM の定款の承認。
 - ・ オーロ・プレット市がユネスコの世界人類文化遺産のリストに登録される。
 - ・ MEC におけるフーベン・ルードヴィヒ体制の始まり。
- 1981 ・ MEC に文化担当事務局 (SEC) が創設。 SPHAN と文化問題担当事務局, (SEAC) はその所属事務局に変わる。
- ・ SEC のセミナーにおいて『 MEC の文化政策の運用の基準線』文書の作成。
- 1982 ・ アロイージオ・マガリヤインスがヴェニスで死去。
- ・ マルコス・ヴィニシウス・ヴィランサが SEC を引き受ける。
 - ・ MEC におけるエステール・デ・フィゲイレド・フェラス体制の始まり。
 - ・ オリンダ市がユネスコの人類文化遺産のリストに登録される。
- 1982 ・ ハイムンド・オットーニ・デ・カストロ・マイア財団に属する諸博物館とメロ・レイタン生物学博物館が FNPM に編入される。
- ・ サン・ミゲルの伝道村遺跡群がユネスコの人類文化遺産のリストに登録される。
- 1984 ・ シネマテカ・ブラジレイラが FNPM に編入される。
- ・ ラザール・シーガル美術館が FNPM に編入される。
- 1985 ・ (ブーレ・マルクス所有の) シーチオ・サント・アントーニオ・ダ・ピカが FNPM に編入される。
- ・ SEC の廃止と文化省 (MinC) の創設。ジョゼ・アパレシード・デ・オリベイラが文化相となる。
 - ・ MinC の枠内に国立歴史芸術遺産事務局 (SPHAN) と文化活動事務局 (SEAC) を設置。
 - ・ アンジェロ・オズワルド・デ・アラウージョ・サントスが SPHAN の指揮を執る。
- ・ ジョゼ・アパレシード・デ・オリベイラが連邦自治区知事になったため MinC を辞す。
 - ・ 『新共和国・文化協定』文書の作成。
 - ・ MinC がアロイージオ・ピメンタの指揮下に入る。
 - ・ ヒカルド・シオグリアが FNPM の会長に任命される。
 - ・ ブラジリアで MinC 主催の二つのセミナーが開催。一つは市民社会の代表とのセミナーで、もう一つは内部のセミナーであり、その結果は『文化政策』と題する文書となった。
 - ・ サルバドールの歴史センターとコンゴニャス・ド・カンポ (ミナス・ジェライス州) のマツシーニョのイエス教会がユネスコの人類文化遺産のリストに登録される。
- 1986 ・ MinC におけるセルソ・フルタード体制の始まり。
- ・ ジョアキン・ファルサンが FNPM の会長に任命される。
 - ・ サルネイ法の認可。
 - ・ SPHAN と FNPM の定款の認可。
 - ・ イグアス国立公園がユネスコの人類文化遺産のリストに登録される。
- 1987 ・ オズワルド・ジョゼ・カンボス・メロが SPHAN の事務局長と FNPM の会長に任命。
- 1988 ・ ブラジル憲法発布。文化については 215 条および 216 条で特に言及。
- ・ パルマーレス文化財団の設立。
 - ・ MinC がジョゼ・アパレシード・デ・オリベイラの指揮下に入る。
 - ・ アウグスト・カルロス・ダ・シルバ・テレスが FNPM の会長に任命。
 - ・ SPHAN の諮問委員会が保存プロセスの記録に関しても意見を述べるようになる。
- 1989 ・ アウグスト・カルロス・ダ・シルバ・テレスが SPHAN の事務局長に任命。
- ・ イータロ・カンポフィオリートが SPHAN の事務局長と FNPM の会長に任命。
- 1990 ・ MinC が廃止され、共和国大統領に直属の文化省

が創設。

- ・ SPHAN と FNPM が廃止され、ブラジル文化財保護研究所 (IBPC) が創設。
- ・ SPHAN の諮問委員会の廃止。

参考文献：

荒井芳廣

「ブラジル黒人の居住空間に関するノート」、『神奈川工科大学研究報告A』、18、1994、pp. 1-12。
 「「教会の扉」の記号学」、G・アンドラーデ、中牧弘允編『ラテンアメリカの宗教と社会』、新評論、155-175。
 「ブラジルのカーニバルと都市政策」、国際シンポジウム『新・都市の時代：都市の演出』報告書、千里文化財団、1996、pp. 97-107。
 「ブーレ・マルクスにおける庭園美学とエコロジ：あるブラジル人風景作家の軌跡」、『神奈川工科大学研究報告A』、1997、
 「熱帯ベルエポック期リオ・デ・ジャネイロにおける呪術師たち——ジョアン・ド・リオの『リオの宗教』についてのノート」、『民俗宗教の諸相』（仮題）、春秋社、1999年3月刊行予定

Amaral, Aracy (organizadora)

Arquitetura Neocolonial : America Latina, Caribe, Estados Unidos. São Paulo: Memorial da America Latina, 1994.

Andrade, Rodorigo M.F. de

Rodorigo e seus tempos. Rio de Janeiro : Fundação Nacional Pró-mémoria, 1986.

Andrade, Rodorigo M.F. de

Rodorigo e o SPHAN; coletanea de textos sobre o patrimonio cultural. Rio de Janeiro : Ministerio da Cultura, Fundacao Nacional Pró-mémoria, 1987.

Cadernos do Patrimônio Cultural, No.3 (Caderno Especial : Um plano para a preservação do Catete), outubro, 1992.

Cadernos do Patrimônio Cultural, No.4 (Area Portuárias. Genova, Porto, Barcelona, Baltimore, Manchester, Rio), 1994.

Costa, Lucio

Lucio Costa, Registro de uma vivencia, Empresa das Artes, 1995.

Fonseca, Maria Cecilia Londres

O Patrimônio em processo: trajetoria da politica federal de preservação no Brasil. Rio de Janeiro: UFRJ;IPHAN, 1997.

Gimaraens, Céça de

Lucio costa: un certo arquiteto em incerto e secular roteiro. Rio de janeiro: Relume Dumara, 1996.

Gonçalves, José Reginaldo Santos

A retórica da pedra: os discursos do patrimônio cultural no Brasil. Rio de Janeiro: UFRJ;IPHAN, 1997.

Kuniyoshi, Celina & Pires, Walter

Casarão do Chá, Mogi das Cruzes. São Paulo : Condephaat, 1984.

Lemos, A.C.Carlos

Alvenaria Burguesa, 2.ed.rev.,ampl. São Paulo:Nobel, 1989.

Magalhães, Aloisio

E triunfo? : A questão dos bens culturais no Brasil, Rio de Janeiro: Nova Fronteira; Brasília: Fundação Nacional Pro-mémoria, 1985.

Mayerhoffer, Lucas

Reconstituição do Povo de São Miguel das Missões, Rio de Janeiro: Faculdade Nacional de Arquitetura da Universidade do Brasil, 1947

Miceli, Sergio

Intelectuais e classe Dirigente no Brasil (1920-1945), São Paulo:Difel, 1979

Miceli, Sergio (org.)

Estado e cultura no Brasil, São Paulo:Difel, 1984.

Prefeitura da Cidade do Rio de Janeiro

O Rio de Janeiro e seus prefeitos : evolução urbanistica da cidade, Prefeitura da Cidade do Rio de Janeiro, 1977.

Revista do Patrimonio Historico e Artistico Nacional, No.22 / 1987.

Revista do Patrimonio Historico e Artistico Nacional, No.24 (Cidadania)/ 1996.

Severo, Ricardo

A Patria Republicana, São Paulo:Julio Costa, 1921.

Teixeira Coelho

Dicionario de de Critico Politica Cultural: Cultura e Imaginario, Sao Paulo: editora Iluminura, 1997.